

(口絵解説)

花の病害虫 (11) ——シクラメン——

1 シクラメンの生産状況

シクラメンは、冬に出荷、消費される鉢物花きの代表である。一方、栽培期間が1年以上と長い各種の病害虫の発生が問題となっている。また、鉢物花き類は株全体が商品となるため、被害許容水準が低い。そのうえ、発病初期や加害初期には被害が目立たず防除時期を逸しやすい。登録薬剤が少ないことも、的確な防除を困難にする一因となっている。シクラメンは施設で栽培されるため、圃場衛生管理などを含めた総合的な高い水準の防除技術が要求される。

2 シクラメンの病害

現在までに報告されている病害のうち、細菌病は軟腐病、葉腐細菌病、芽腐細菌病が、糸状菌病は灰色かび病、萎ちょう病、炭そ病、苗立枯病等が発生しやすい。

病徴：細菌病は芽や葉柄基部から発病、腐敗することが多い。葉柄、花柄や塊茎等に病勢が進展すると、株全体が萎ちょう、軟化する場合が多い。軟腐病では特有の悪臭が、葉腐細菌病では葉柄や塊茎等の導管褐変が特徴である。芽腐細菌病では低温期に発生しやすいことや、組織が軟化しても悪臭があまりないことが診断のポイントとなる。灰色かび病は花卉に褐色や赤味のある斑点を生じるほか、葉身や葉柄にも病斑を形成し、やがて各罹病部に灰褐色のかびを生じる。萎ちょう病は、最初に株の一部の葉身が黄化し始め、葉柄が生氣を失って萎ちょうするほか、病株の塊茎は維管束部が褐変する。炭そ病は、葉に円形～不整形の褐色の病斑を形成し、葉柄や塊茎の表面にもややくぼんだ病斑を形成する。また、幼芽を侵して芽枯症状となることもある。苗立枯病は幼苗の地際部がくびれて倒伏、枯死し、塊茎も腐敗する。

病原菌の生態：各病原菌とも残渣、用土、育苗箱や鉢等が一次伝染源になる場合が多く、多湿条件下でまん延しやすい。細菌病は灌水時の水はねにより罹病株から細菌が飛散しやすい。また、植え替え等の管理作業時に株に生じた傷口が細菌の侵入口となってまん延する。軟腐病菌や芽腐細菌病菌は寄生範囲の広い多犯性の細菌である。炭そ病や苗立枯病は高温で発病が多い。炭そ病菌はイチゴにも病原性を持つとされ、施設などで相互に感染している可能性もある。苗立枯病菌は多犯性で多くの野菜や花きを侵す。灰色かび病菌は、やや低温を好むために出荷時期と発病適期が重なりやすく、被害が大きくなる場合がある。萎ちょう病菌は土壌伝染する。年間を通じて発病がみられるが、昼夜の温度差が大きくなるよう

な管理では株の抵抗力が低下し、発病が助長される。

防除：資材や用土等はあらかじめ消毒したものを使用するほか、常に発病に注意し、発病株は直ちに施設外で適切に処分する。また、鉢替え等の管理時には株に傷を付けないような配慮が必要で、高温多湿な時期には特に注意する。底面給水等の病原菌の飛散や株の濡れを避ける灌水方法や、施設の換気による湿度の低下等も有効な衛生管理技術である。薬剤による防除は予防に重点を置き、発病前から定期的に行う。軟腐病にはストレプトマイシン・有機銅水和剤、葉腐細菌病には有機銅水和剤及び粒剤、灰色かび病にはイミノクタジン酢酸塩・ジラム、イミノクタジン酢酸塩・ポリオキシシン、チオファネートメチルの各水和剤、DBEDC乳剤、萎ちょう病にはヒドロキシイソキサゾール液剤、ペノミル水和剤が登録がある。

3 シクラメンの害虫

シクラメンではチャハマキ、キンケクチプトゾウムシ、サツマイモネコブセンチュウ、ワタアブラムシ、シクラメンホコリダニ、チャノホコリダニ、ナミハダニ、ヒラズハナアザミウマ、ミカンキロアザミウマ、ハスモンヨトウ等が問題になる。これらの害虫の多くは、加害初期には被害が目立たず、防除時期を逸しやすい。そのため、被害の徴候を知って早めに対処する必要がある。

被害と診断：シクラメンホコリダニは0.2 mm内外の小さなダニで、肉眼で見つけることは難しい。生息部位は蕾、花卉、花卉とがく片の間などにある。被害は花の変形、花卉の色の部分的な変色、花や芽の枯死である。これに対して、チャノホコリダニでは花や芽の枯死に至ることはほとんどない。ヒラズハナアザミウマやミカンキロアザミウマ等のハナアザミウマの被害は、チャノホコリダニのそれと症状からは区別しにくい。両者は被害症状の出ている蕾の中に多く生息するので、虫によって確認することが必要である。ハスモンヨトウの若齢幼虫は葉や花の上において食害するが、老齢幼虫は土の中や株間に生息し、若い葉や花芽を食害するので防除を怠ると被害を大きくする。

防除：シクラメンホコリダニの防除にはケルセン乳剤やベンゾエピン乳剤が有効である。しかし、単なる散布だけでは効果がなく、あらかじめホコリダニが生息する蕾や花を除去してからの薬剤散布が有効である。シクラメンホコリダニ対策はハダニやチャノホコリダニに対しても有効である。ハナアザミウマ類の防除剤としては、チオシクラム水和剤やカルタップ水溶剤があるが、花への薬害が心配されるので出荷期近くでは使用しない。

(埼玉県園芸試験場 根本 久・酒井和彦)